

南の風 428

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

前号の続きになります。

(3) 教え込むと脳は休止する

- 「自分で考える」選手を育てるためには、それ相応の学習環境をつくる
- 教え込みのコーチングばかりだと → 考える回路がすでに休止
- ゾーンやレーンを描いて、作戦盤でマグネットを動かすような教え込みばかりだと、クリエイティブな選手は育たない。
- 例えば、プレスをかけるタイミングや位置を詳細にレクチャーして教え込むと、想定していなかったシチュエーションが発生すると、選手はパニックに陥る。教え込まれた時点から、「自分で考える」という脳の働きは休止する。
- バasketボールは、想定していた現象が起きる可能性が、圧倒的に低いスポーツであり、教え込みの指導は意味をもたなくなる場合が多い。
- 選手は、「知っていることしか見えていない」。指導者は、情報を知らせるのではなく、コートの上でその都度「見るべきものが見える」選手を育てることが重要ではないか。そのためには、「指導において、なるべく制限をかけない」ようにする。
- 「言葉はアクションを生む。アクションはパフォーマンスを生む」 → 注意深い言語化、コーチの言葉の精査が必要。
例: 「行け!」、「プレス!」 → 「行け! って言ったけど、何をしてほしかったのか?」言葉かけの場面で、丁寧にイメージを合わせておく。でないと、目の前で起きる現象は違うものになってしまう。
コーチは「走れ!」、「全然走れてないぞ」。選手は「今日はめちゃめちゃはしかったのに」。試合中に「走れる」とはどんな選手なのか。イメージが揃っていないことが多い。
こういったことを、すり合わせることでチームとしての共通認識が生まれる。

IV 伸ばしたい相手を知る

(1) 「沈黙＝考えていない」は間違い

- おとなしく、自己主張しない選手 → 文句を言わないし、態度に表さない。話を聞かないと分からないのに、指導者が、「どうせやる気がない」、「考えていない」と、決めつけていないか?
- 同じ言葉の投げかけ → それぞれの見方、考え方によって受け取り方は違うのに、指導者が、「私は、あの子はやる気がないと思う」とラベリングしてしまうことがある。このジャッジの「主語」は指導者自身。そうではなく「主語を置き換える作業」をすることが重要。

次号に続けます。